

夏号

第314号

一粒の麦

社会福祉法人エデンの園

2019年7月20日

ひとつぶのむぎ



「つむぎ輪音コンサート」カーファグランデと「あたぼろし」



「つむぎ輪音コンサート」KCスピリット



「じょいほっぷ」職員とも仲良しです



「つむぎ輪音コンサート」地域の皆さんも来られました



「じょいほっぷ」ダンスの振り付け確認中かな



「じょいほっぷ」楽しく共同作業



「じょいほっぷ」宿題おあらせるぞ



「じょいほっぷ」みんなでハイポーズ

聖書のことは

一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。
しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。(聖書 ヨハネの福音書12章24節)

～ 地域とのつながり ～

第2福祉課 課長 那 須 健太郎

広報委員会から大きな課題を頂きました。私が最も苦手とする「地域福祉や地域とのつながり」に関するテーマです。

インターネットや専門書で検索すれば、それなりの内容になると思いますが、何となくそこには心や情熱が入って来ない気がします。「はて困った。何を書こうか？素直にギブしようか？」などとあれこれ考えているうちに、ふと地域とのつながりを大きなものから分解しようと思いました。

地域=地球→北半球→アジア→日本→西日本→九州→宮崎県と辿って行くと、最も小さな単位は「家族」と言う事に気づきました。たまたま今日は私の誕生日、そうだ！私を産んでくれた母について語ろうと決めました。

今思えば、母は「地域福祉のお手本」のような人だった気がします。今は要介護5の認定を受けており、口からの栄養補給がままならない為に、胃から直接栄養を入れています。意志疎通もままならず握手した状態で手を一回握ればYES二回握ればNOのサインで会話します。そんな母ですが、私が小さい頃は「サザエさん」のように元気がよく近所を走り回っていた記憶があります。専業主婦だったのですが、洋裁学校を卒業した関係で、週1回近所の人が集まってきて、洋裁教室を開いていました。各自手弁当や自家製の漬物や菓子を持参し「ワイワイ・ガヤガヤ」していた記憶があります。

当時はコンビニのない時代でしたので、近所の団地の方が卵を貰いに来たり、私も何回か向かいに醤油や砂糖を貰いに行かされたり、出来たものを持って行かされたりした覚えがあります。

母は、意図的に家族の分以上に多くの「おかず」を作っていたのではないかと思います。カレーライスやおでん等をご近所に配ったり、逆に頂いたり、時には上がり込んでお茶したり、よもやま話に花が咲いていたのではないかと思います。当時はそれが当たり前に行われていた時代でした。

地域福祉を語るうえで「スープの冷めない距離」と言う言葉がよく使われますが、母は無意識のうちに「地域福祉・地域とのつながり」を実践していた気がします。

「地域福祉・地域とのつながり」はある意味漠然としていますが、実は各関係福祉法の横軸を貫く根幹的且つ共通の位置付けと思っています。ですから私はより理解を深める為に以下の独自且つシンプルな考えでこれを処理し整理するようにしています。

「泥で濁ったコップの水は時間が経つとやがて透明な水になり底に泥が沈殿します。しかしコップを振ると直ぐ濁った水に戻ります。」

日々ほぼ透明な水の中で生活していますが、実は根底には同和問題・いじめ・ネグレクト・少子高齢化・孤独死等の様々な地域課題が沈殿・潜在化しています。これらを繋ぐキーワードが「地域福祉・地域とのつながり」に他なりません。

これらを考える場合、意図的に一旦コップを振って、濁った水と向き合い取り組んで行く必要があります。地域によって差はありますが、この作業を繰り返す事で次第に濁りが薄くなっていく事自体が「我がごと丸ごと」地域共生社会の実現に向けての第一歩になるのではないかと考えます。

昔、母や先人達が何の苦勞なく笑顔で実践していた地域活動の精神を受け継ぎ次の世代にも時代の流れに即した形で伝えて行きたいと思います。

公助に依存するばかりではなく、自助→共助の意識が各地域に広がるべく取り組んで行きたいと思います。

後手に回りがちなテーマですが、改めて考える機会を与えて下さりありがとうございました。

